

# マテオ・ガルシア・プマカウアの軌跡

——植民地時代末期ペルー社会の考察——

真 鍋 周 三

## はじめに

「ペルー独立一五〇周年に関する国家委員会(Comisión Nacional del Sesquicentenario de la Independencia del Perú)」が、一九六九年にリマで当時の革命的軍事政権によって設置された。この政権は新生ペルーの創造においてナシヨナリズム、とりわけ民族の統合を重視していた。当委員会によるアカデミズムへの貢献は、来たる一九七一年の「独立一五〇周年記念式典」の挙行にむけて史料の編纂や文献類の刊行、また第五回アメリカ歴史学国際会議(Quinto Congreso Internacional de Historia de América)のリマにおける開催(一九七一年七月)等を研究者に委託したことであった。その成果の一つは、一七八〇年を起点とする『ペルー独立資料集(Colección documental de

La Independencia del Perú』(全三〇巻)の刊行(一九七二—一九七四年)となつて結実した<sup>1)</sup>。

ペルー独立をめぐる新しい解釈の出発点を一七八〇年と定めたのは、その年が「クリオリヨ、メステイツ、原住民らを統合した独立の先駆者」トゥバック・アマル(Tupac Amaru)の反乱(一七八〇—八一年)<sup>2)</sup>が起こつた年であつたことによる。この考え方の背景には「ペルーの解放は、特権を有する少数派のベニンスラーレス(スペイン人)からクリオリヨへの政治的権力の単なる移行ではなく、あらゆる階級やあらゆる民族集団を統合した長期の闘争」から生まれるとの解釈がある。これは、かつての独立闘争を、帝国主義に対抗するベラスコ政権の「真の国家的独立」をめざす闘争にオーバラップさせて捉えようとする議論であつた<sup>3)</sup>。

とはいえ、トゥパック・アマルの反乱がペルー独立の最初の試みであったと、すべての研究者が考えているのではない。エラクリオ・ボニーリヤは、トゥパック・アマルの反乱は本質的にクリオリーヨを脅えさせ、抵抗運動から彼らを分離させるという結果を招いたと捉えた。<sup>(4)</sup> またジョン・フレデリック・ウィーベルは、トゥパック・アマルの反乱をスペイン領アメリカにおける独立運動の先駆と捉えるのは誤りであり、植民地解放闘争の時期に独立派は原住民の利益を無視し原住民を放置した、と述べている。<sup>(5)</sup>

ところで、ペルーではトゥパック・アマルとはほぼ同時代を生きたマテオ・ガルシア・ブマカウア (Mateo García Pumacahua, 一七四八—一八一五) もまた独立の英雄として広く知られ、人々の関心を引き付けずにはおかぬ存在である。<sup>(6)</sup> ペルー独立革命 (一八〇五—二四年) のうち初期の抵抗運動の中で最もよく知られているのは一八一四—一五年のクスコの革命 [La Revolución del Cuzco、ホセ・アングロ (José Angulo) の反乱 (革命) とかブマカウアの反乱ともよばれる]<sup>(7)</sup> であるが、これにブマカウアが指導者として参加し重大な役割を果たしたからである。一方、ラテンアメリカの独立運動においては、大勢の下級聖職者、

特にセクラール (secular、世俗にあって修道会に属さない聖職者。在俗司祭。クリオリーヨが大半を占める) の参加がみられた。<sup>(8)</sup> ペルーもその例外ではなかった。マリア・コンスエロ・スバークスは、ペルー独立革命に参加した聖職者「三九〇人」を、セクラールが二〇一人、<sup>(9)</sup> レグラール (regular、各派修道会士) 一七七人、その他一二人と分解した。<sup>(10)</sup>

本稿は、トゥパック・アマルの反乱からクスコの革命に至る時代を駆け抜け、しかもこの二つの事件に深く関係したマテオ・ガルシア・ブマカウア [クスコ市近郊の原住民共同体のカシケ (cacique Ⅱ クラカ curaca、首長)] をとりあげ、その足跡を辿ることによって、植民地時代末期ペルー社会とそこに生きた原住民の状況を「教権」の動向<sup>(11)</sup> と絡めながら検討するものである。こうした作業が、ラテンアメリカの独立運動との関係でトゥパック・アマルの反乱の方向性を捉える場合の一助となれば幸いである。

そこで、以下の構成によって、この解明を進めてゆくことにしよう。一章「トゥパック・アマルの反乱とブマカウア」では、ペルー副王領の歩みを簡潔に紹介した後、ブマカウアの生い立ち、トゥパック・アマルの反乱への彼の対

応を述べる。またブマカウアの出身地方における原住民の負担にも言及する。II章「植民地時代末期ペルーの社会状況」では、カルロス三世の改革、特に行政機構の改革と自由貿易政策がクスコやアレキパ地域に及ぼした影響ならびに貢納を検討する。III章「独立運動とブマカウア」では、スペインからの独立への動きとそれに対するブマカウアの対応を当時の社会状況とも絡めながら述べる。IV章「結び」では、カシケの地位の脆弱性、地域格差等について述べた後、ブマカウアの反乱の意味を探る。

## I トウパック・アマルの反乱とブマカウア

先ずもって、マテオ・ガルシア・ブマカウアの生きた時代のペルーを知るうえで、その前提を簡単にみておく必要がある。

ペルー副王領はスペイン領アメリカの中では古い歴史をもち、スペインの支配が最も強固に根づいた地域であった。一六世紀以来、ペルー副王領の内部には二つの中枢があった。広大な地域の統治者としての副王のいる政治上の中心部のリマと、アルトペルー(現ポリビア)における大量の銀の生産を背景とした経済の中心地ポトシである。旧インカ

帝国の中心部であったクスコ地域は政治的にはリマの衛星的位置にあり、経済的にはポトシに依存してきたのである。<sup>13)</sup>

ところが、一八世紀になると、ポトシをはじめとするアルトペルーの銀鉱業の凋落が決定的となった。長期にわたる採掘により鉱床が枯渇したことが最大の原因といえよう。ポトシの人口は減り、その市場は縮小していった。一七五〇年代に約七万人いたポトシ市の人口は、一七八〇年代には約三万五、〇〇〇人に減少し、オルロ銀山も同様に人口が減った(最盛期の人口約七万人に対し、一八世紀半ばには約二万人であった)。しかもアルトペルーは、一七七六年にペルー副王領から分離して新設されたラプラタ副王領の傘下に編入された。<sup>14)</sup>

しかしペルーでは一七七六年から一八一二年の間に銀の生産額はおよそ二倍に増加する。これは、セロ・デ・パスコ、ワロチリ、ヤウリ、ワルガヨクにおける銀鉱業の台頭によるものである。一八世紀の最後の四半世紀になると、リマの経済力が高まり、リマは経済面でもペルー副王領の中枢となった。<sup>15)</sup> この背景にはリマ商人の活動があった。彼らはリマ市で商人ギルド(Coartagudo)を形成して海外との貿易をはじめペルー副王領内の商業を支配するに至った。<sup>16)</sup>

独立期を通じてリマは、アメリカ大陸における反革命の強力なとりでとなったが、これにはリマ商人が関係している。例えば、資金援助があげられる。一七七七年から一八一四年の間にリマ商人〔商人ギルド審議会 (Tribunal del Consulado)〕が王権に提供した軍資金 (寄付金や貸付金として) の額は五〇〇万ペソ以上といわれるのである。<sup>(17)</sup> また数千人からなる軍隊を派遣し王党派を支援している。<sup>(18)</sup>

マテオ・ガルシア・プマカウアが歴史の舞台に踊り出るのは、一七八〇年一月にトゥバック・アマルの反乱が勃発した直後のことである。以下では、プマカウアの生い立ちと、トゥバック・アマルの反乱に彼がいかに対応したかについて述べる。

トゥバック・アマルの反乱では原住民や植民地人に対する搾取・収奪・不正を追放するために、原住民以外にもクリオリヨ (アメリカ生まれの白人)、メスティソ (白人と原住民の混血児)、ムラート (白人と黒人の混血児)、黒人など多様な人々が共に立ち上がった。<sup>(19)</sup>

これに対抗して、コレヒドール (地方行政官) や当局 (王党) 軍の側に立って反乱の鎮圧に奔走したのがマテオ・ガルシア・プマカウアであった。一七四八年九月二二日に

彼は誕生する。カルカ・イ・ラレス地方チンチェーロ村のモンセラテ聖母マリア教会でモグロベホ神父から洗礼を施された。父親のフランシスコ・プマカウアの死去により、一七七〇年一〇月一四日、同地方同村のカシケ、司政官 (gobernador) を継ぐ。一七七三年には原住民中隊の指揮官に任命されるなど、早くから軍人として頭角を現わす。<sup>(20)</sup>

カルカ・イ・ラレス地方はクスコ市の北方に位置し、肥沃な地域として知られていた。ジャガイモ・穀物 (トウモロコシ、小麦等) ・ユカなどが豊富に収穫され、家畜の飼育にも適していた。これらの産物の供給を通じて古くからクスコ市と結合してきた。多大な人口を擁するクスコ市の消費生活の生命線だったといっても過言ではない。<sup>(21)</sup> この地方はトゥバック・アマルの反乱に同調しなかった。また一七六五年から一七七九年にかけて各地で多発した原住民蜂起の記録をみても、当地で反乱が起こったという記録はない。<sup>(22)</sup>

カルカ・イ・ラレス地方の原住民の負担をここでみておこう。貢納 (tributo) に関してクスコ教区の年間平均徴収額は一人当り六・七六ペソ (法定) <sup>(23)</sup> といわれるので、これに従うとしよう。成年男子 (一八〜五〇歳) <sup>(24)</sup> 人口はクスコ教区一四地方の中で最下位 (一、一二人) …一七五四

年)<sup>(24)</sup>であり、ポトシ銀山とワンカベリカ水銀鉱山のミタ(mita、賦役)の義務は免除されていた。<sup>(25)</sup>レパルティミエント(repartimiento de mercancías、コレヒドールがカシケを通じてその支配領域下の原住民に物品を強制販売し、その代価を強制徴収する方式)については、成年男子一人当りの年間負担は一・三ペソ(法定)と算出される。<sup>(26)</sup>よって、貢納とレパルティミエントの合計額は一八・〇六ペソとなり、他の地域に比べてこの地方の負担の程度が相対的に大きかったと言い難い。<sup>(27)</sup>

一七八〇年一二月下旬。トゥパック・アマルの反乱軍はクスコ市をめざして北上しつづつあった。ウルコス地点でディエゴ「Diego Cristóbal」、トゥパック・アマル・ホセ・ガブリエル・コンドルカンキ(José Gabriel Condorcanqui)の義弟)の率いる軍勢約六、〇〇〇人が本隊と別れ、ウルバンパ川を北上し、クスコ市北方の「物資供給地帯」に進攻する。<sup>(28)</sup>一二月末、パウカルタンボ、カルカ、ピサク、ユカイ、ラレス、ウルバンバ、オリヤンタイタンボが、ディエゴ軍の攻撃をうけて次々と陥落していった。反乱軍本隊に包囲されたと見え、物資の補給を断られたクスコ市はパニクに見舞われる。<sup>(29)</sup>

そこで登場するのがプマカウアである。軍事訓練を施しておいたチンチエーロ村一帯の原住民を動員して当局側に立って参戦。クスコ戦時委員会が派遣した騎兵・歩兵連隊と共闘するとともに、彼らの兵站を担うことになった。一七八〇年一二月三〇日、クスコのコレヒドールは「大佐」の称号を彼に贈っている。<sup>(30)</sup>トゥパック・アマル反乱軍に対してプマカウアが指揮した戦闘や彼の行動の記録<sup>(31)</sup>を検討してみると、彼が大勢の原住民を動員して終始クスコ当局、つまり地方有力者主体の戦時委員会の側に立ち、反乱軍に立ち向かい、反乱の鎮圧に奔走したことがわかる。特に一七八一年二月二三日にクスコに到着した王党軍(大半が白人)に一万四、〇〇〇人を上回る原住民が合流して討伐軍が編成され、それが動くことになるが、これにプマカウアが果たした役割は絶大だった。結局、トゥパック・アマラ反乱の指導者・幹部の多くは捕えられ(四月六日)、五月下旬にクスコ市において処刑される。またディエゴらの軍も一七八二年までには鎮定され、プマカウアはペルー副王やクスコ司教といった植民地権力者から絶賛されたのであった。<sup>(32)</sup>

ところで、日常生活においてプマカウアは「カシケ」、

「司政官」としてコレヒドールと結合した実務家であった。相当な財産を所有しており、それを守り収益を増やすのに懸命だった。反乱鎮圧への貢献によって獲得した信用、とりわけ「大佐」の肩書はそれに大いに役立つことになった。<sup>(35)</sup> 反乱を契機に彼は、社会的にいちだんと有利な立場に立つたのである。

## II 植民地時代末期ペルーの社会状況

植民地時代末期ペルー南部において国庫収入の増大をめざす王権が最も重要視したのは、アルカバラ (alcabala、販売税) と原住民から徴収する貢納であった。というのも、一七八〇年代初めの大反乱の後、アルカバラの徴収体制が整備・拡充され、また原住民の支配機構のうちレバルティミエント制の廃止と鉱業の衰退に伴うミタの規模縮小により貢納が見直されることになったからである。<sup>(36)</sup>

以下では、カルロス三世 (Carlos III、在位一七五九～八八) の改革 (一七六三～八七年)、特に行政機構の改革と自由貿易政策がペルー社会に及ぼした影響をクスコやアレキパの地域を対象としながら検討し、クリオーリヨへの反響や王権による原住民の抑圧、搾取の実態とその結末に

ついてみてみたい。

### 1 行政機構の改革と自由貿易の影響

#### (1) 行政機構の改革

これに関しては、一七八四年七月のコレヒドール制の廃止とそれに代わって導入されたインテンデンテ (intendente、監察官) 制にまず注目しなければならない。ペルー副王領はリマを頂点に、トルヒーリヨ、タルマ、ワンカベリカ、ワマンガ、アレキパ、クスコの七つのインテンデンシア (Intendencia、監察官領、一七九六年二月一日付でプーノが追加され八つとなる。地図参照) から構成された (ラブラタ副王領へのインテンデンテ制の導入は一七八二年。アルトペルーはラパス、ラブラタ、ポトシ、コチャパンバの四つのインテンデンシアからなった)。インテンデンテ (王室はこれに権力を集中させた) が各インテンデンシアを管轄することになった。コレヒドールが支配していた「地方 (provincia)」は「地区 (partido)」と改称され、インテンデンテが任命したサブデレガド (subdelegado、監察官代理。行政、徴税、司法、公安を司る権限を与えられたが、かつてのコレヒドールに比べると、その権限はきわめて弱い状態に止められた) の管轄するところとなった。<sup>(37)</sup>

地図 植民地時代末期ペルー副王領のインテンデンシア



出所 Mörner, *The Andean Past*..., p. 96.

これを図式化して示すならば、かつての原住民支配機構である王室→コレヒドール→カシケ→共同体員は、王室→インテンデンテ→サブデレガード→カシケ→共同体員に変わったことになる。<sup>39)</sup>

このインテンデンテ制の特徴は、「司教区」には匹敵

する広大な行政体である「インテンデンシア」を築きはしたけれども、結果的に各「地区」において王権が著しく弱体化した点にある。<sup>40)</sup> 換言するならば、コレヒドール制の廃止が「地区」レベルにおける権力の分散化を引き起こしたことである。特にサブデレガード、カシケ、司祭——「教区」レベルでは各「地区」は司祭の管理する複数の教区に分かれていた——の間に、原住民の余剰をめぐって権力闘争が繰り広げられるようになった（やがてカビルド (cabildo、市参事会) のメンバーをも巻き込む）。それはまず、貢納と教会収入をめぐるサブデレガードと司祭の対立となって噴火するのである。<sup>41)</sup>

ところで、クリオーリョの利益を代弁する機関であったカビルドは、旧コレヒドール制の下では一般に行政上の問題を審議する機関としては力が弱かった。しかしインテンデンテ制の下では活動の余地が増えたことをここで想起しておきたい。<sup>42)</sup>

次に当時のペルー副王領における人口分布をみておこう。第1表は一七九一年の人口分布を示したものである。副王領の白人人口の分布をインテンデンシア別に多い方から挙げると、アレキパを第一位に、クスコ、リマ、トルヒーリョ、

タルマ、ワマンガ、ワンカベリカの順となる。特にアレキパのインテンデンシアに白人が最も集中していた（ペルー副王領全体の約二九％。これにクスコのインテンデンシアの白人人口を加えると、全体の五二％を占める）ことに注目したい。またその白人人口の多くはアレキパ地区、特にアレキパ市に集中していたのである（第2表）。原住民人口の分布では、クスコを筆頭に、トルヒーリョ、タルマ、アレキパがこれに続く。

クスコのインテンデンシアは、クスコ司教区を構成していたかつての一四地方のうち、カラバヤ、ランパ、アサンガロを除く一一地区からなつた。<sup>(45)</sup> その人口構成（一七九一年）は第3表の如くである。白人人口の二分の一以上がクスコ地区（クスコ市を含む）に集中していたことがわかる。また一七八七年にはクスコ・アウディエンスシア（Audiencia、<sup>(46)</sup> 聴訴院）が新設された。トゥバック・アマルの反乱の舞台となつたクスコ地域では、反乱の後、王権の支配が強化され、クスコ・アウディエンスシアはシエラ南部における王党派の拠点となつたのである。<sup>(46)</sup>

## （2）自由貿易の影響

「自由貿易」の目的はスペイン本国の発展をめざすもの

であつて、アメリカの発展ではなかつた。王権は国庫収入の増加に向けて邁進する。ジョン・リンチは、自由貿易の結果、一七八二〜九六年の僅か一五年間にスペインからスペイン領アメリカへの年間平均輸出額が約四倍に上昇したと指摘している。<sup>(46)</sup> ペルー副王領においても自由貿易の影響は顕著に現われた。例えば、一七七五〜七九年の五年間にペルー副王領に輸出されたヨーロッパ商品の価格は二、三八三万八、一八三ペソであつたが、一七八五〜八九年には四、二〇九万九、三二三ペソを記録した。ペルーからヨーロッパへの輸出品（一七八五〜八九年）の九〇％は銀を主体とする貴金屬であり、残りの一〇％は第一次産品であつた。<sup>(47)</sup>

次にラプラタ副王領、とりわけアルトペルーとの関係に目を向けたい。

一七七八年の「自由貿易勅許」の発布とブエノスアイレスの開港を契機にヨーロッパから人や商品が同港を経由してラプラタ副王領に本格的に流入し始めた。<sup>(48)</sup> 例えば、ラプラタ地域の白人人口は一七七八年の一年間に従来約二・三倍に増加した。<sup>(48)</sup> 商品の流入に関しては、一七七二〜七六年の五か年間にブエノスアイレス港に入港した船舶が僅か五隻だったのに比べ、一七九二〜九五年には三五五隻が入



第1表 ベルー副王領における人口構成 (1791年)

(人口の単位:人)

インテンデンスシア	村落数	全人口	原住民	メスティン	スペイン人	ムラート	黒人	その他
アレキバ	84	136,801	66,609	17,797	39,357	7,003	5,258	777
クスコ	134	216,382	159,105	23,104	31,828	993	284	1,068
ワマンガ	135	111,559	75,284	29,621	5,378	943	30	303
ワンカベリカ	88	30,917	23,899	4,537	2,341	—	41	99
リマ	181	149,112	63,181	13,747	22,370	17,864	29,763	2,187
タルマ	206	201,259	105,187	78,682	15,939	844	236	371
トルヒーリョ	149	230,967	115,647	76,949	19,098	13,757	4,725	791
合計	977	1,076,997	608,912	244,437	136,311	41,404	40,337	5,596

出所 Francisco Pini Rodolfi, "La población del Perú a lo largo de un siglo: 1785-1884," en Washington Patiño et al., *Informe demográfico, Perú* (Lima, 1970), P. 20.

第2表 1792年、アレキバ地区とアレキバ市の人種構成

人種・社会的地位	アレキバ地区		アレキバ市	
	人数 (単位:人)	全体に占める割合 (%)	人数 (単位:人)	全体に占める割合 (%)
スペイン人*	22,882	60.8	15,737	71.4
メスティン	5,228	13.9	4,129	18.7
原住民	5,872	15.6	—	—
自由身分の黒人	603	1.6	580	2.6
黒人奴隷	751	2.0	658	3.0
自由身分のムラートとサンボ	1,763	4.7	420	1.9
ムラートとサンボの奴隷	531	1.4	506	2.3
合計	37,630	100.0	22,030	99.9

\*「スペイン人」はクリオーリョを含む。

出所 Brown, *op. cit.*, p. 32.

第3表 クスコのインテンデンスシア11地区の人口構成 (1791年)

(人口の単位:人)

地	区	教区数	村落数	全人口	原住民	メスティン	スペイン人	ムラート	奴隷	その他
クスコ	8	—	32,082	14,254	53	16,122	646	203	804	
アバソカイ	9	8	25,259	18,419	4,739	1,937	50	81	33	
アイマラエス	16	34	15,281	10,782	—	4,474	—	—	24	
カルカ・イ・ラレス	5	6	6,199	5,519	320	347	—	—	13	
ウルバンバ	6	4	9,250	5,164	3,194	835	—	—	57	
コタバンプス	13	14	19,824	18,237	1,382	186	—	—	19	
バルロ	9	19	20,236	15,034	2,733	2,331	117	—	21	
チュンビビルカス	11	12	15,973	11,475	—	4,471	—	—	27	
ティンタ	11	13	34,968	29,045	5,420	324	152	—	27	
キスピカンチス	10	16	24,337	19,947	4,306	37	21	—	26	
パウカルタンボ	4	8	12,973	11,229	957	764	7	—	16	
合計	102	134	216,382	159,105	23,104	31,828	993	284	1067*	

\*第1表では「1,068」とあるが、「1,067」は修正した人数

出所 Pini Rodolfi, *op. cit.*, p. 22.

港した<sup>(50)</sup>ことから、その規模の高まりが察せられよう。またこの商品の内容については、特にスペイン製の織物類の占める割合が大きかった。こうしてなだれ込んだヨーロッパ商品はやがてアルトペルーに浸透し、ペルー副王領の南部一帯にも達したのである<sup>(51)</sup>。

一方、クスコのインテンデンシア経由でラプラタ副王領に運ばれた商品の規模や構成を一七九〇年の記録(第4表)でみると、その規模は七三万四、五〇五ペソ(年間)であり、内容の点では織物類が支柱をなしている。またフロレス・ガリンドが示したクスコ産品の輸出額によれば、クスコのオブラへ(Obraje、織物工場)やチヨリリーヨ(Chorillo)産の織物の割合は約七三%と算出されている。また一七九三年頃にポトシ市場へ運ばれたクスコ産品に占める織物の割合は七八%であった。こうしてみると、クスコ地域の主要生産物は織物であったことがはっきりする。

ところで、アルトペルーへのヨーロッパ製商品はブエノスアイレス港を通じてのみ入ったのではない。太平洋岸からも膨大な量の海外からの商品が流れ込んだのである。この商品の輸入元はリマ商人であった<sup>(52)</sup>。だが輸送面で重要な役割を果たしたのはアレキバ商人である。この背景には、

新副王領傘下に入ったアルトペルー市場からの利益の低下を懸念したリマ商人がアレキバ商人との結合、強化を図り、利益の喪失に対抗したという事情があった。リマ・アレキバ枢軸の形成である<sup>(53)</sup>。このことはアレキバ市のもつ地理

第4表 1790年、クスコのインテンデンシアからラプラタ副王領への輸出品

生産物(規模)	単位当り価格	市場価格(ペソ)	全体の割合(%)
オブラへ産のフランネルの一種(65万5,200バラ)	4レアル	327,600	44.6
砂糖(2万3,720アローバ)	5ペソ	118,600	16.2
トウモロコシ(1万4,000ファネガ)	5ペソ	70,000	9.5
粗綿布(tocuyos)(12万バラ)	3レアル	45,000	6.1
衣類(11万2,800バラ)	21/2レアル	35,250	4.8
羊毛(1,200アローバ)	25ペソ	30,000	4.1
他の生産物		108,055	14.7
合計		734,505	100.0

1バラ=0.84メートル/1アローバ=11.5kg/1ファネガ=122kg

出所 Mörner, *Perfil...*, p. 93. / その他, Alberto Flores Galindo, *Arequipa y el sur andino siglo XVIII-XX* (Lima: Editorial Horizonte, 1977), pp. 20-21, p. 25. / Magnus Mörner, "Some Characteristics of American Structure in the Cuzco Region towards the End of the Colonial Period," *Boletín de Estudios Latinoamericanos y del Caribe*, Vol. 18 (Amsterdam, 1975), p. 26. 参照。

的位置とも関係がある。同市は沿岸部とシエラ南部を結ぶ  
 広大な空間の中の一大拠点であった。<sup>(56)</sup>

一方、一八世紀のアレキパ地域では、ビトル谷、マヘス  
 谷、モケグア谷に代表される如く河川の流域に立地したブ  
 ドウ園から生産されたブドウを原料とするブドウ酒とその  
 蒸溜酒であるブランデーのシエラ南部諸都市（クスコ、ラ  
 パス、ポトシ等）への供給によって、その経済発展が促さ  
 れ、白人の地主や商人の一大勢力が形成されていた。これ  
 は別稿において既に述べた。<sup>(56)</sup> 植民地時代末期においても事  
 態は変わってはいなかった（第5表参照<sup>(57)</sup>）。アレキパ地域  
 の農産物の年間平均生産額は、こうした酒類の他にトウモ  
 ロコシや小麦等の穀物、砂糖、野菜や果物を含めて二〇〇  
 万ペソ（一七九六年）にも達し、その多くがシエラ南部に  
 運ばれたのである。農園主や商人からなるアレキパ・オリ  
 ガルキー（寡頭支配集団）にとってシエラ南部は重要な市  
 場であった。アレキパ・オリガルキーは「二〇家族」に代  
 表され、なかでもゴイエネチェ（Goyeneche）家／バレダ  
 （Barreda）家（図1）、コシオ（Cossío）家／メナウト  
 （Menaut）家（図2）、トリスタン（Tristán）家（図3）、  
 デ・ラ・フエンテ（de la Fuente）家などが想起されると

第5表 アレキパのインテンデンシアの3渓谷におけるブドウ酒生産  
 （単位：ボティハ）

生産地 年代	モケグア谷	マヘス谷	ビトル谷
1784	190,379	72,108	67,018
1786	279,354	72,285	72,542
1796	309,587	152,556	110,893
1799	306,617	167,349	105,935
1804	275,000	120,000	90,000

出所 Wibel, *op. cit.*, p. 63.

第6表 1750-1809年、クスコ財政府のアルカバラ徴収額の変化

年代（10ヵ年）	徴収額 （単位：ペソ）	指数 （1740-49年=100）
1750-1759	201,638	97
1760-1769	316,598	152
1770-1779	333,775	160
1780-1789	1,334,174	639
1790-1799	812,890	389
1800-1809	791,509	379

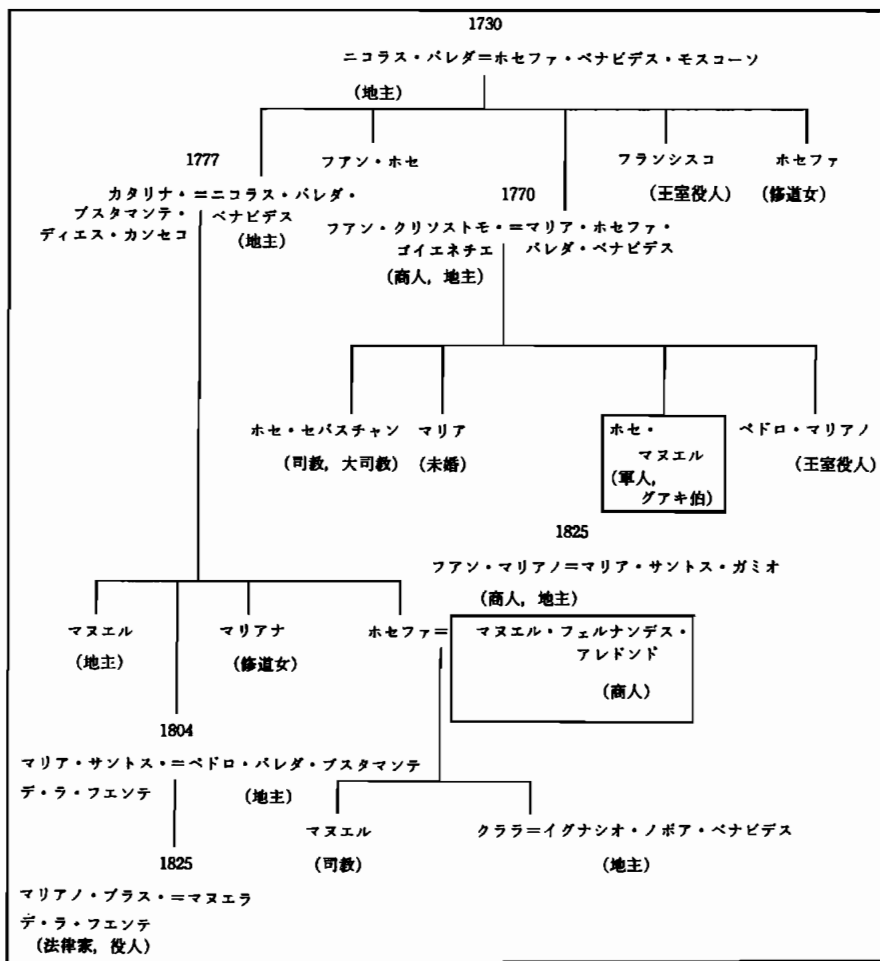
出所 Golte, *op. cit.*, p. 33.

ころである。<sup>(58)</sup>  
 こうした商品流通の拡大によってペルー副王領における  
 アルカバラは急増した。クスコ司教区では、一七七〇年代  
 一〇か年間のアルカバラ徴収額は三三万三、七七五ペソだっ

たが、一七八〇年代の一〇か年間では一三三万四、一七四ペソと約四倍に上昇している(第6表)。五か年当りの平均に換算して、これがかつての「一四地方」のレバルティミエント法定代価のアルカバラ(五万二、七九四ペソ)と比較すると、その一三倍にあたるのである。一七九〇年代、一八〇〇年代では徴収額が少し低下するが、それでも一七七〇年代のおよそ二・四倍を記録していることがわかる。<sup>(6)</sup>

自由貿易はスペイン本国へのアメリカ植民地の従属をいちだんと強化さ

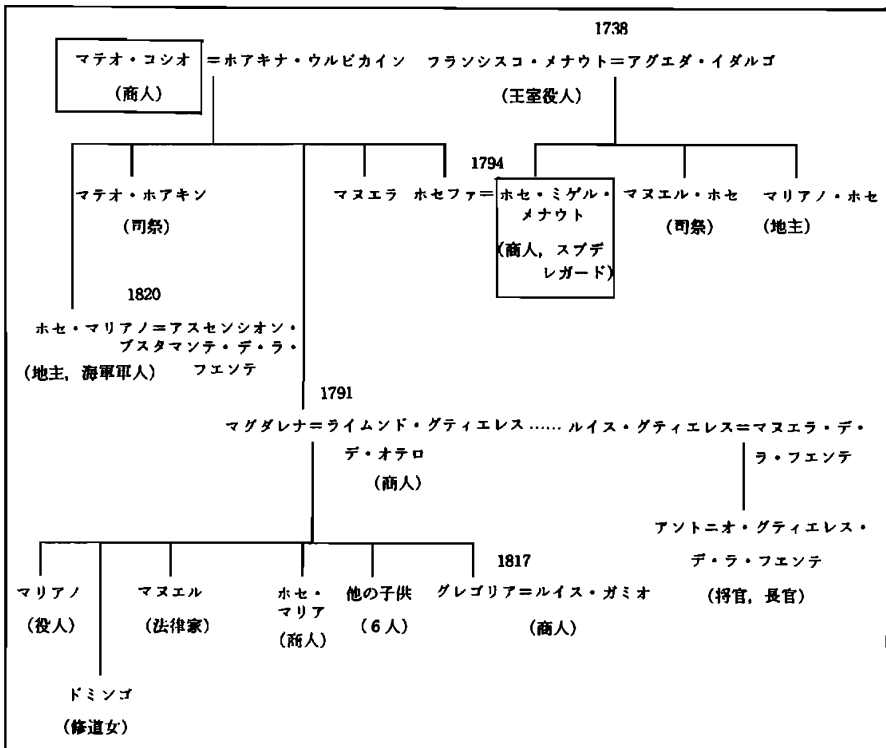
図1 バレダ家/ゴイエネチェ家の系図



出所 Wibel, *op. cit.*, p. 481.

せ、新たな問題を引き起こす。大量に押し寄せてきたヨーロッパ商品のうちの多くは織物類であつたが、これは、クスコ地域において生産されたロバ・デ・ラ・ティエラ（Ropa de la tierra、土着の荒織物）との競合を招く。ヨーロッパ製品は土着の織物に比べて良質であり、しかも安価だったから、クスコ産の織物は市場競争に敗れ、その売れ行きが急激に低下した。それに引き替え、ペルーやアルトペルーの市場ではヨーロッパ産の織物が溢れていたという。クスコ地域のオブラへは壊滅的な打撃を被り、斜陽化を辿った。クスコ地域の産業構造の脆弱さが露呈されたのである。この点は、リマの大商人層と固く結びつき、比類をみない酒類の生産と輸出にもつばら立脚していたアレキパ地域——アレキパ市の最有力商人にしてアレキパ平野やマヘス谷に農園を営むマテオ・コシオ（Mateo Cossio、スペイン・サンタンデル出身。図2参照）は、一八〇四年にブランデーとブド

図2 コシオ家/メナウト家の系図



出所 Wibel, *op. cit.*, p. 484.

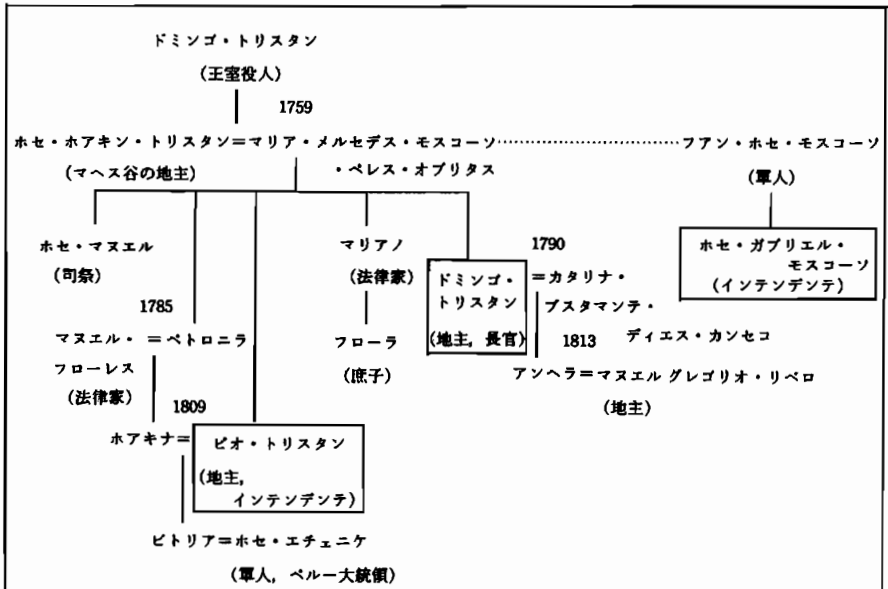
ウ酒の生産・販売がアレキバの全経済を支えていると述べた<sup>(63)</sup>——の場合と決定的な相違をなしている。

## 2 貢納

植民地時代末期にペルー副王領からの貢納徴収額は上昇を遂げた<sup>(64)</sup>。貢納徴収額の規模は原住民成年男子人口に左右されたから、全インテンデンシアの中で原住民人口の規模が首位を占めたクスコのインテンデンシア(第1表)からの徴収額がペルー副王領において最高だったのは当然である。ここでは、クスコ地域における貢納について検討する。

まず貢納の徴収径路を示すと、クスコのインテンデンシア一一地区の各地区においてスブレガードは、インテンデンテの命令によりカシケを通じて原住民成年男子から貢納を徴収し、それを財務府(Caja Real)に納入した<sup>(65)</sup>。それゆえ、クスコ財務府の記録から貢納徴収額のおおよその傾向を知ることが可能である。クスコ地域では第7表の如く、一七七〇年代一〇か年間の貢納徴収額(八三万三、八九九ペソ)の指数を一〇〇とすれば、一七九〇年代一〇か年間(二八四万六、四一一ペソ)の指数は三四一へと著しく上昇している。この増額分——五か年平均に換算すると、一〇〇万六、二五六ペソ——は、かつての「一四地

図3 トリスタン家の系図



出所 Wibel, *op. cit.*, p. 494.

第7表 1760—1809年、クスコ財政府の貢納徴収額の変化

年 代 (単位-10ヵ年)	徴 収 額 (単位：ペソ)	指 数 1770-79年=100
1760-69	634,408	76
1770-79	833,899	100
1780-89	1,898,537	228
1790-99	2,846,411	341
1800-09	2,300,000	276

出所 Golte, *op. cit.*, p. 35.

第8表 クスコのインテンデンシア11地区からの貢納徴収額 (1786年)  
(年間, 単位：ペソ)

地 区 名	貢納徴収額*
ク ス コ	5,342
ア バ ン カ イ	17,784
ア イ マ ラ エ ス	20,762
カ ル カ ・ イ ・ ラ レ ス	5,793
ウ ル バ ン パ	8,540
コ タ バ ン バ ス	26,490
パ ル ロ	14,436
チュンビビルカス	12,627
カナス・イ・カンチス	41,396
キスビカンチス	24,358
パウカルタンボ	8,081
合 計	185,609

\*端数(レアル)は切り捨てた

出所 Moreno Cebrián, *op. cit.*, pp. 709-713.

方」のレバルティミエント法定代価(一三二万九、八五〇ペソ、五か年当り)の約七六%に相当し、またこれに課せられたアルカバラ(五万二、七九四ペソ)の約一九倍にあたる。一八〇〇年代の一〇か年間においても貢納徴収額の

増加は著しく、その指数は二七六を記録している。クスコ地域における貢納の増加がいかに驚異的なものであったかが理解されよう。

一六九七—一七二二年にクスコ地域の原住民共同体からクスコ財政府に納入されるはずの貢納の五三%以上が少なくとも二か年の延滞状況にあったといわれているように、原住民にとって貢納は従来から大きな負担となってきた。

ところで、クスコのインテンデンシアの各地区別の原住民人口の構成(第3表)比と貢納額の構成(第8表)比は相関がみられるから、一般にクスコ地域の原住民成年男子一人当りの年間の貢納負担額(六・七六ペソ、一七五四年)もまた、以後上昇を遂げたといえる。仮に一七六〇年代一〇か年間の貢納徴収額の指数「七六」を一七五四年にそのまま適用したとしよう。一七九〇年代ではその指標が「三四一」と、一七六〇年代の約四・五倍に高まっているから、人口変動を考慮しなければ一七九〇年代における原住民成年男子一人当りの年間の貢納負担額は約三〇・三ペソと算出される。この額は、一七五四年のカルカ・イ・ラレス地方<sup>②</sup>における原住民成年男子一人当りの貢納とレバルティミエントの年間負担額の合計である「一八・〇六ペソ」(I

章)を上回っていることになる。とすれば、レバルティミエントが存在していた時期との比較において、一七九〇年代では原住民の負担が軽減されていたとはいえない。一方、一七九二年のカルカ・イ・ラレス地区における一人当りの年間平均収入が二八・四ペソであったというマグヌス・メルナーの説(第9表)を想起するならば、単純な収支計算ながら、当地区の原住民にとって貢納はきわめて大きな負担だったといわざるをえない。

ところで、先述の貢納額はあくまでも財務府における登録額であり、官職俸給額やシノド(sinodo、財務府から教区教会への固定納付金)などの歳出額を加算しなければならぬこと、さらに貢納徴収の現場における「不正」を考慮する必要がある。つまり、原住民から実際に徴収された貢納は、財務府の登録額をかなり上回ったものと考えねばならないのである。さらに原住民に課せられていたオブベシオン(obvención、教区民の結婚式や葬儀等の司宰を通じて司祭が教区民から徴収した手数料)などの教会への納付金や司祭への物質面での諸負担を考慮するならば、原住民の状況がトゥバック・アマルの反乱後一挙に改善されたとはいえない。当時の状況についてオフエラン・ゴドイは、

スプデレガード、カシケ、司祭による原住民の搾取が強化されており、レバルティミエントが法制化されていた時期(一七五六—一七八〇年)とさほど変わらぬ状態だったと説明している。

植民地時代末期のクスコ社会においても人種の違いが人々の社会的地位を左右したことに変わりはない。一般に社会のピラミッドの頂点にいるスペイン人とクリオーリョが、その底辺にいた原住民大衆を支配していた。両者の中間にメスティソ、ムラート、黒人、サンボ(黒人と原住民の混血

第9表 1792年、クスコのインテンデンシアの7地区における収入(年間、単位:ペソ)

地区名	年間収入	1人当りの収入
アバソカイ	350,000	13 9/10
アイマラエス	14,000	9/10
カルカ・イ・ラレス	176,239	28 2/5
ウルボンバ	89,098	9 3/5
チュンビルカス	18,600	1 1/5
カナス・イ・カンチス	152,309	4 2/5
パウカルタンボ	390,972	30 1/5

出所 Mörner, *Perfil...*, p. 96.



児)が存在した。<sup>(7)</sup> 原住民は貢納額を何としても稼がねばならなかった。その方法は主に二つあった。食糧等の余剰生産物を市場(クスコ市)に売却して代金を得るか、あるいは余剰労働力を白人が経営するオブラヘやアシエンダ<sup>(8)</sup>、輸送部門などに提供して賃金を得るか、である。<sup>(9)</sup>

ところで、クスコ地域において大きな比重を占めていたオブラヘやチョリリヨなどの織物生産部門の斜陽化、衰退という事情が想起される。この部門に関係していた原住民は労働条件の悪化に晒されたり、もしくは自己の織物の値段が下落したために、現金の調達が困難に陥り、彼らの生活条件はいちだんと悪化を辿ったのである。これは教区司祭にとっても痛手だっただろう。当時、司祭は収入源を縮小されたり、権限を狭められるなど王権から疎外されつつあった。彼らの暮らしは原住民からの物質的奉仕を前提に成り立っており、原住民の生活苦はただちに司祭の生活に反映したからである。<sup>(10)</sup>

クスコ地域においては、特にクリオーリヨ、原住民、司祭らが王権から著しく抑圧、疎外される状況にあったことが、以上から明白である。<sup>(11)</sup>

### III 独立運動とプマカウア

一八〇八年五月のナポレオン軍によるイベリア半島のマドリッド市への侵攻とブルボン朝の消滅にはじまるスペイン本国の動揺<sup>(12)</sup>により、スペイン領南アメリカでは本国からの独立を求める運動が起こる。一八〇九年七月、アルトペルーのラパスで、続いてプーノ、チュキサカでも反乱が発生した。一八〇九年八月のキトでは早くも独立宣言がなされる。一八一〇年に入ると、こうした動きはさらに活発となる。カラカス(四月)、プエノスアイレス(五月)、サンチアゴ(九月)において王党派官僚が追放され、執政評議会(Junta)が独立を宣言したのだった。<sup>(13)</sup> こうした事態は王党派の拠点であったリマのペルー副王庁に大きな衝撃を与え、副王アバスカル(José Fernando de Abascal<sup>(14)</sup>) 在位一八〇六〜一六)は対応を迫られることになった。<sup>(15)</sup> 以下では、独立への動きとそれに対するプマカウアの対応を当時の植民地社会の状況とも絡めながら検討していきたい。

#### 1 独立運動の発生とプマカウア

ペルー副王アバスカルによって一八〇九年六月にクスコ・アウディエンシアの議長に任命されていたアレキバの将官ホセ・マヌエル・デ・ゴイエネチェ (José Manuel de Goyeneche) はアルトペルーの独立運動を粉碎するためにラパスに赴いた。一八〇九年のラパスの反乱に対してゴイエネチェは、彼のいとこのドミンゴ・トリスタン (Domingo Tristán) とピオ・トリスタン (Pío Tristán) の兩名 (図3 参照) を司令官に任命し、約六五〇人からなるアレキバの民兵 (この兵士の多くはアレキバ地域を代表する白人有力者 (地主、商人) の一族に所屬) とクスコやプーノなどにおいて徴集した原住民からなる合計約五、〇〇〇人の討伐軍を編成し、これを率いて、同年一〇月に反乱を鎮圧する。この直後、ドミンゴ・トリスタンはラパスのインテンデントに就任する。ところで、この反乱軍にファン・アントニオ・フィゲロア (Juan Antonio Figueroa)、スペイン・ガリシア地方生まれ (が身を投じていたことが注目される。彼はトゥパック・アマルの反乱軍において活躍した人物であり、クスコのインテンデンシアのバルロ地区に住み、そこでアシエンダやオブラヘを営んでいた。一七八一年の判決では無罪だったが、一八〇九年には死刑を宣告され、一

八一〇年一月二九日、ラパスで絞首刑に処せられた。

一八一〇年にはラプラタ副王領の首府ブエノスアイレス市において独立をめざすいっそう大規模な運動が発生した。ブエノスアイレス執政評議会 (Junta) はラプラタ副王領全域を統轄する独立政府の樹立を宣言する。一八一一年、ファン・ホセ・カステリ (Juan José Castelli、クリオリヨ) の率いる解放軍がブエノスアイレスからアルトペルーに進撃し、独立闘争は高揚する。これに対し、リマの商人ギルド審議会は多額の軍資金を副王アバスカルに提供し、経済的に王党派を支援した。カステリ軍は各地で多くの植民地人から歓迎される。ラパスにおいて独立派に加わった人々の中には、一七八一年のトゥパック・カタリ (Tupac Katari、本名フリアン・アパサ (Julían Apaza) ) によるラパス包囲戦に関係していた者も含まれていた。例えば、ペドロ・ドミンゴ・ムリーリョ (Pedro Domingo Murillo、クリオリヨ) は王党派員として包囲軍と戦った経歴を持ち、ファン・マヌエル・カセレス (Juan Manuel Cáceres、メステイソ) はカタリ軍の一員だった。カステリの解放軍が与えた影響は大きく、北はワマンガ、タルマ、ワヌコの地域から、西はタクナに飛び火する。タ

クナではブエノスアイレス執政評議会に同調して独立が宣言された。<sup>(52)</sup>ペルー副王はカステリ軍の鎮圧を再びゴイエネチエに託す。ゴイエネチエは、アレキパから到着した約一、二〇〇人の士官を率い、一八一三年五月に辞任するまで二年にわたりアルトペルーにおいて王党軍を指揮する。<sup>(53)</sup>ところで、クスコからも討伐軍がラパスに進撃するが、この中心となったのが大佐ブマカウアであった。数千人の原住民を率いた彼は、「反乱した原住民の大敵」としてラパスからオルロを転戦し、一八一二年六月に解放軍を鎮圧する。クスコに凱旋したブマカウアはその功績を認められ、「准将」に格上げされた。翌年の一八一二年にはクスコ・アウディエンシアの臨時の議長に就任する。<sup>(54)</sup>

ところで、一八〇九年以来アルトペルーの反乱を鎮圧するためにはクスコからさし向けられた討伐軍の費用がすべてクスコ財務府の負担であったことに注目したい。これが財政の悪化を招き、結局、貢納に付が回ってきたのだった。多くの原住民が討伐軍に参加していたから、原住地にいる者の貢納負担が強化されたり、本来は貢納を免除されていた人々の一部にもそれが課せられることになった。<sup>(55)</sup>この重圧に対してクスコ地域の原住民は反抗の意思を固めていっ

たように思われる。このことは、スブデレガードらと利害を異にする司祭が貢納の存在を疑問視し始めたことと無関係ではあるまい。<sup>(57)</sup>例えば、一八一一年一〇月にバルロ地区ヤウリスケの司祭ファン・グアルベルト・メンディエタ(Juan Gualberto Mendieta)は教区民に、本国会(Cortes)が既に貢納廃止の決議を行っていること、判事の命令に従う必要のない旨を説教したのだった。<sup>(58)</sup>司祭は土着語を話して原住民と日常的に接していたから、こうした教えが彼らに与えた影響は大きかったにちがいない。<sup>(59)</sup>

一八一二年に入るとスペイン領アメリカ植民地の政治情勢は急転する。九月三〇日、リマにおいてカジス憲法(Constitución de Cadiz、一八一二年三月一九日発布)<sup>(60)</sup>が通達されると、立憲的カビルドの議員選挙の実施と本国会への代表派遣要請の聲が高まった。ペルー副王領南部の諸都市ではこれが契機となって、クリオーリヨの間に現状変革の期待が一举に高まったのである。<sup>(61)</sup>クスコでは、二月九日に憲法の写しが届く。法律家ラミレス・デ・アレリャノ(Rafael Ramírez de Arellano)らの尽力によって選挙が実施され、一八一三年二月一四日に立憲的カビルドが成立する。<sup>(62)</sup>クスコ市の新カビルドは、地方行政に関し

てリマからの支配に抗議し、また貢納をめぐるスプデレガードの腐敗を告発するなど行政問題に介入してゆく。<sup>(註)</sup> こうした動きは、憲法の適用を妨害しようとするクスコ・アウディエンシア（王党派）との対立を引き起こす。一月二日にラミレスらが当局に一時逮捕されるなど事態が悪化するなかで、当時のクスコ・アウディエンシア議長ブマカウアは辞任したのだった。<sup>(註)</sup> 一〇月一〇日にはクスコにおいてピセンテ・アングロ (Vicente Angulo)、ガブリエル・ベハル (Gabriel Béjar)、フアン・カルバハル (Juan Carbarar) ら立憲派のクリオーリョが逮捕される。一月五日、クスコの王党派守備隊が、広場を占拠していた群衆に発砲し、多数の死傷者が出る。クスコ・アウディエンシアはラミレスやアルカルデ (市会議長) のマルティン・バレル (Martín Valer) ら数人を告発した。その結果、一八一四年の初頭にラミレス、バレルらは逮捕され、リマに収監されたのだった。<sup>(註)</sup>

## 2 ブマカウアの反乱

ブマカウアがスプデレガードにあてた貢納をめぐる文書が残されている。まずその内容を要約して紹介する。

一八一三年三月二五日付の第一の文書は、「一八一二年

のクリスマスに納めるテルシオ (tercio)」の貢納五五七ペソの処置に関するものである。ブマカウアは貢納徴収表を添え、スプデレガードに次の件を問合せている。「五五七ペソ」をブマカウアの裁量に委ねるか、それとも財務府に納入すべきかと。第二の文書は、一八一三年三月二七日付であり、貢納が八〇〇ペソしか集まらなかったことの理由に関するものだ。多くの原住民が死亡しており、また大勢の者が精神的・肉体的障害をうけているため、貢納が徴収できない旨の申し開きがなされている。<sup>(註)</sup>

第一の文書から、貢納の年間徴収額については、「五五七ペソ」の数倍の額がチンチェーロから徴収されていたことがわかる。当時の貢納の著しい高まりが察せられる。またこの額を財務府に納入すべきか否かの問合わせは、本国における貢納の廃止決議を熟知したうえで、ブマカウアの発言と解せられる。

第二の文書には多くの原住民の死亡や精神的・肉体的障害状態が記されているが、これはアルトペルーで戦った当地の原住民たちの末路を示しているのではあるまいか。一八一一年のアルトペルーの反乱鎮圧の功績によってブマカウアは「准将」及び「クスコ・アウディエンシア議長」と

いう名誉ある地位に就きはしたものの、戦闘の後遺症は決して小さくはなかったと考えられる。多数の戦没者や傷病者を出した結果、カシケでもあるプマカウアは貢納の徴収に行き詰まってしまったものと思われる。

一八一四年五月、スペインでは国王フェルナンド七世が復位する。彼はただちにカジス憲法を停止し、それまでになされていた国会の諸決議を無効とした。国会を閉鎖して再び絶対君主となり、旧来の特権を回復してゆく。またアメリカ大陸での独立運動を鎮圧するために軍事力の増強をはかり、対応に乗り出した<sup>(註)</sup>。これはスペイン領アメリカにとり深刻な事態となった。

クスコではホセ・アングロ（アバンカイ地区アバンカイの地主）を中心とするアングロー族（ピセンテ、マリアノ（Mariano）、聖職者ファン（Juan））が憲法の遵守やアルカバラの廃止をはじめ諸改革の実施を求めるクリオーリョやメステイソの支持をうけて、王党派を代表するアウディエンシアと対立していた。一八一四年八月三日、アングロ一族を中心に公開カビルドに集まったクリオーリョらはスペインからの解放をめざして反乱に立ち上がった。そしてこの反乱の指導者となったのがプマカウアや司祭のフラン

シスコ・カラスコン（Francisco Carrascón、スペイン人）であった<sup>(註)</sup>。プマカウアは今度は王党派としてではなく、「独立派」を率いて戦うに至ったのである。またカラスコンは単にペルーだけの独立を志向したのではない。新大陸全体にわたる遠大な独立国樹立の構想を抱いていたという。さらにその首都をリマではなくクスコに置くべきだとの言明からも察せられるように、クスコ中心主義の考えをもった人であった。ジョン・フィッシャーは、この「クスコ中心主義」はカラスコン一人の考えではなく、反乱した民衆の意思を反映したものと捉えている<sup>(註)</sup>。ルイス・ミゲル・グラベは、この反乱のイデオロギーをシエラ南部に徘徊していた「インカ（インカ帝国）」の建設願望と捉え、ペルー南部の人々の総動員をめざすうえでクスコは最高の舞台だったと述べている<sup>(註)</sup>。

反乱はクスコからブーノヤラバス、ワマンガ、アレキパ等の諸都市に広がった。この具体的経過や内容等については枚数の都合で多くを割愛するが、反乱軍の構成や行動等の骨子を最小限度印しておく。一八一四年八月中旬に司祭イルデフォンソ・ムニェカス（Idefonso Muñecas）と大尉マヌエル・ピネロ（Manuel Pínelo）が指揮する第一師

団はブーノ、ラパスに向かって出陣する。ペルー南部やアルトペルーから多くの原住民がこれに参加する。九月一日、反乱軍はラパス近郊にあってその軍勢は約五〇〇人の小銃兵と投石器・槍・石付き棍棒で武装した二万人の原住民からなっていたという。ワマンガをめざした司祭ベハル、マリアノ、ウルタド・デ・メンドサ(Hurtado de Mendoza)の率いる第二師団もまた途中で大勢の人々の支持を得て膨らむ。プマカウアとピセンテの率いる第三師団は約五〇〇人の小銃兵と武装した五、〇〇〇人の原住民より成り、アレキパに進撃する。

副王アバスカルは陸軍元帥フランシスコ・ピコアガ(Francisco Picoaga)の率いるリマの部隊をアレキパに差し向けた。一八一四年一月九日、アレキパ市近郊ラ・アパチュエタの戦いで解放軍は、アレキパのインテンデンテのホセ・ガブリエル・モスコーン(José Gabriel Moscoso、図3参照)の軍に合流したりマの部隊からなる王党軍を撃破した。モスコーンとピコアガをはじめ指揮官の多くが捕虜となる。この中にはアレキパ・オリガルキー「二〇家族」に含まれる最有力者のマテオ・コシオ(図2参照)、マヌエル・フェルナンド・アレドンド(Manuel Fernando

Arredondo、図1参照)、コシオの義理の息子ホセ・メナウト(José Menaut、商人。図2参照)、フランシスコ・デ・ラ・フエンテ(Francisco de la Fuente、鉱山業者)らがいたのだった。アレキパの王党派は一時的に勢力を弱められる。クスコから到着した解放軍に対するアレキパの人々の対応は様々であった。プマカウアらは十一月二日に公開カビルドを召集し、アレキパ市民らと将来の展望を討議している。下級聖職者の多くが解放軍に同調した。例えば、司祭のホセ・デ・アルセ(Mariano José de Arce)はフェルナンド七世を暴君として公然と非難するとともに、スペインからの独立宣言を行うよう人々に訴えた。ホセ・マリア・コルバチョ(José María Corbacho、法律家にしてサン・ヘロニモ学院の教師。アルセの同僚)もまた解放軍に協力した一人だった。しかしアレキパ司教ルイス・ゴンサガ・デ・ラ・エンシーナ(Luis Gonzaga de la Encina、バスク地方出身。アレキパに来る前はカナリア諸島に在住)は独立に反対だった。モケグア市に拠って解放軍と敵対している。

一八一四年一月三〇日、解放軍はアレキパの占拠を中止し、モスコーンとピコアガを捕虜にしてシエラに引きあ

げた（一八一五年初頭、解放軍はこの両者を処刑）。一八  
一四年一月九日、ファン・ラミレス（Juan Ramirez）  
の率いる王党派がアレキパ市に到着し、同市は再び「王党  
派の要塞」に戻るようになった（ピオ・トリスタンがイン  
テンデンテになる）<sup>(10)</sup>。

これに先立ち、ペルー副王の指揮下で王党派（一八一四  
年にリマ商人から一〇〇万ペソ余りの資金供与をうける）  
の巻き返しはワマンガから始まっていた。一八一四年一〇  
月にはリマの常備軍がワマンガ市を奪回。一月にはラバ  
スがファン・ラミレスの王党派の手に落ちた。アレキパか  
らアヤビリに撤退していた反乱軍も勢力を削がれてゆき、  
一八一五年三月一日のウマチリの戦いで壊滅させられる<sup>(11)</sup>。  
三月一日、シクアニにおいてプマカウアらは捕えられた。  
その後のプマカウアは悲劇的結末を辿る。彼の全財産は没  
収された。「カシケ」、「司政官」、「准将」の地位を剝奪  
され、一八一五年三月一七日にシクアニにおいて略式裁判  
の後、処刑されたのであった。三月二五日、ラミレス軍は  
クスコ市に入城する。三月二九日、アングロ兄弟をはじめ  
反乱軍の指揮官たちは銃殺の刑に処せられた<sup>(12)</sup>。  
王党派のプロバガンダがこれに続く。モスコーンは殉教

者に仕立てあげられ、独立派の原住民は「邪悪なインディ  
オ」、「虐殺者」とみなされ、「人種的対立」へと問題が摩  
り替えられた<sup>(13)</sup>。一八一五年、モスコーンに代わりアレキパ  
の臨時のインテンデンテに任命されたピオ・トリスタンは、  
一八〇九年以降のアルトペルーにおける戦いを次の如く締  
め括った。

「…狂信的な反乱者が南アメリカを…恐怖に陥れた六  
年間に及ぶ戦いは、国王の神聖な権利の防衛のみならず、  
我々自身の生命と財産を守るという点でもまた正当化され  
る戦いであった<sup>(14)</sup>」と。

#### IV 結 び

原住民は貢納、ミタ、レバルティイメントを通じて王権  
から搾取、収奪されてきた。一八世紀においてアルトペルー  
の銀鉱業の衰退に伴いミタが縮小する。コレヒドール制の  
終焉によりレバルティイメントも姿を消す。残されたのは  
貢納である。植民地時代末期、貢納の徴収規模が高まり、  
原住民は抑圧されるに至った。

ところで、ペルー副王領では、特に政治、経済等の面で  
地方間格差がきわめて大きく、しかも地域間に対立があっ

た。リマやアレキバ地域の支配勢力は王権の後ろ楯を必要とし、王党派の立場を死守した。このことは、アレキバの有力者が、特に酒類の一大市場であったアルトペルーにおける独立運動の鎮圧に奔走した点を想起すれば明白である。他方、「自由貿易」による経済的困窮に喘ぐクスコ地域では対応は異った。最終的にクリオーリヨらはカシケを仲介として原住民を動員し、独立を志向した。このカシケの代表がブマカウアであった。

一七四八年にクスコ市近郊に生まれ、カシケ・司政官・軍人として登場したブマカウアは、トゥバック・アマルの反乱鎮圧の功績により大佐として出世し、激動の時代を生きた。

一八〇八年のスペイン本国の激変を契機とするスペイン領南アメリカの独立運動の発生とその波及は、一八〇九年のラパスの反乱及び一八一〇年のブエノスアイレスにおける執政評議会の成立と独立宣言、そして一八一一年のアルトペルーへの進軍に端的にみられた。この運動は、一七七八年以降のラプラタ副王領における市場経済活性化の中から登場したクリオーリヨ勢力を基盤としているように思われる。その波は交易路沿いにペルー副王領にも及ぶ。

リマのペルー副王庁は王党派の拠点であり、副王アバスカルはアルトペルーの反乱の鎮圧をクスコ・アウディエンシアの議長ゴイエネチェに委ねる。クスコからの討伐軍の指揮官に任命されたのが、大勢の原住民を動員しえたブマカウアであった。反乱は鎮圧され、ブマカウアの功績は高く評価される。彼は准将、アウディエンシア議長という名譽ある地位に登る。しかしその戦いの後遺症は決して小さくはなかった。それは貢納負担の強化となって原住民を経済的に圧迫しただけではない。特にチンチェーロ村では従軍した多くの原住民が死傷したのだった（そのことが貢納の支払いに大きな支障をもたらした）。

ここに、貢納に対する原住民の反抗が固められてゆく。この背景には、スブレレガードと対立する司祭が本国会会による貢納の廃止決議を察知し、それを原住民に伝えたとする事情があった。一方、カジス憲法が伝達され、立憲的カビルドの議員選挙の実施、本国会会への代表派遣の声の高まりを契機に、副王領南部の都市ではクリオーリヨの間に現状変革の期待が高まった。クリオーリヨ、メステイソの支持を背景にカビルドによる行政問題への介入が王権（アウディエンシアや副王）との対立を引き起こした。折



しも一八一四年五月にフェルナンド七世が復位し、反動化の波が押し寄せてくる。

結局、一八一四年八月、クススコでは公開カピルドに集まったクリオーリョが反乱に立ち上がる（ホセ・アングロの反乱）。この時点でプマカウアは王党派と訣別し、反乱の指揮者となるのである。また多くの司祭が指揮官として反乱軍に身を投じたのだった。前述のバルロ地区ヤウリスケの司祭ファン・グアルベルト・メンディエタもまた指揮官として反乱軍に加わっていた<sup>(1)</sup>ことは注目に値する。彼が一八一一年一〇月、国会による貢納廃止決議を教区民に伝達した人であったことを想起したい。反乱はクススコからプーノやラパス、ワマンガ、アレキバ等の諸都市に広がる。元来、クリオーリョを主体とした反抗であったにもかかわらず、途中から大勢の原住民が反乱軍に参加していった。そうした原住民の行動が貢納の重圧に起因していることは明白である。結局、反乱は敗北に終るが、その一因として、原住民が蜂起すると反乱者側にいるクリオーリョに対してむしろ恐怖の念を抱かせ、彼らを独立運動から分離させる傾向を招いたことは否めない。一大市場圏へのペルー副王領南部の加入主体が白人であり、その経済的基盤が人口的

次元において圧倒的規模の原住民労働力にあり、そして原住民動員のメカニズムが貢納にある限り、白人と原住民の統一戦線の形成には矛盾が潜んでいたと言わざるを得ない。<sup>(2)</sup>

一八二一年にペルーはサン・マルティン (José de San Martín、一七七八〜一八五〇) 軍の支援によって独立を遂げる。しかしこの独立は、トゥパック・アマルが目指したような「クリオーリョ、メステイソ、原住民ら」の「統合」によって勝ち取られたものではなかった。このことは、その後のペルーに大きな問題を残すことになった。こうしてみると、トゥパック・アマルは「一八二一年のペルー独立」の先駆者だったのではない。スペイン人の専制支配と搾取・収奪から虐げられた人々の解放と自立を目指した、未だ達成されたことのない理想としてのラテンアメリカの「真の国家的独立」の先駆者であった、と言えるのではないだろうか。

注

(1) John Fisher, "Royalism, Regionalism, and Rebellion in Colonial Peru, 1808-1815," *Hispanic American Historical Review*, Vol. 59 (2) (1979), pp. 233-234.

(2) この反乱については、拙稿「一八世紀ペルーにおけるトゥパック・アマルの反乱の社会経済的背景」(『ラテンアメリカ

研究年報』No. 6、日本ラテンアメリカ学会、一九八六年)ノ  
拙稿「一八世紀ヌルーデにおけるトゥパック・アマールの反乱  
——その展開——」(『青山学院大学文学部紀要』第27号、青  
山学院大学、一九八五年)ノ拙稿「一八世紀ヌルーデにおける  
トゥパック・アマールの反乱の帰結」(『南欧文化』第12号、文  
苑、一九八七年)参照。

(3) Fisher, *op. cit.*, pp. 232-233.

(4) トニミンナー・カウダウの『カウダウ』 John Fisher, "La  
rebelión de Túpac Amaru y el programa imperial de  
Carlos III," en *Túpac Amaru II-1780*, ed. Alberto Flores  
Galindo (Lima: Instituto Nacional de Investigación y  
Desarrollo de la Educación, 1976), pp. 117-118. / Fisher,  
"Royalism.....," pp. 235-236. / アダム・マック・アール反乱の  
最新の研究動向を知るには、アマン・ア・フロレンス＝ガリ  
ン、青木芳未訳「アマン・アール革命の歴史」(『歴史ライ  
ブレット』第12号、リオン・アマン・アール・コンテ、一九九  
〇年)ノWard Stavig, "Ethnic Conflict, Moral Economy,  
and Population in Rural Cuzco on the Eve of the  
Thupa Amaro II Rebellion," *Hispanic American Historical  
Review*, Vol. 68, Number 4 (November, 1988), pp. 737-739.  
を参照せよ。

(5) John Frederick Wibel, "The Evolution of a Regional  
Community within Spanish Empire and Peruvian  
Nation: Arequipa, 1780-1845," (Stanford: Ph. D. dissertation,  
Stanford University, 1975), p. 496. / その他、John Lynch,  
"The Origins of Spanish American Independence," in  
*The Cambridge History of Latin America*, Vol. III, edited

by Leslie Bethell (Cambridge: Cambridge University  
Press, 1985), pp. 39-40. 参照。

(6) "Inauguración en el panteón de los proceres de los  
bustos de Túpac Amaru y Pumacahua," *Revista del  
Centro de Estudios Militares del Perú*, año XI, No. 13 (Agosto  
1957-Julio 1958, No. 13), pp. 93-98. / Juan José Vega,  
"Pumacahua: de cacique represor a procer patriota,"  
*Cancha* (Universidad Nacional de Educación, 1985), p.  
252, pp. 278-279. / Pedro Felipe Cortázar, *Documental del  
Perú*, enciclopedia nacional básica (Tomo VIII, Departamento  
de Cuzco) (Barcelona: Ediciones Océano, S. A., 1988),  
pp. 131-132.

(7) カウ・トントロの『カウ・トントロ』 Comisión  
Nacional del Sesquicentenario de la Independencia del  
Perú, *Colección documental de la independencia del Perú*,  
*Tomo III (Conspiraciones y rebeliones en el siglo XIX, La  
revolución del Cuzco de 1814)* (Lima: Comisión Nacional  
del Sesquicentenario de la Independencia del Perú,  
1971) (2) *CDIP*, III (5) 巻、を参照せよ。ノカウの  
反乱とカウの革命は、カウの革命である。

(8) Hans-Jürgen Plien, *La historia del cristianismo en  
América Latina* (Salamanca: Ediciones Sígueme, S. A.,  
1985), p. 377. / Leslie Bethell, "A Note on the Church  
and the Independence of Latin America," in *The Cambridge  
History of Latin America*, Vol. III, edited by Leslie Bethell  
(Cambridge: Cambridge University Press, 1985), pp.  
229-230.

## 地域別にみた独立革命へのセクラールの参加状況

年代 \ 地域*	リマ市	リマ	タルマ	クスコ	ワンカベリカ	ワマンガ	アレキバ	トルヒーリョ	プーノ	**	合計
1805-09	3	-	-	-	-	2	1	-	2	-	8
1810-14	2	-	10	12	-	1	8	-	1	-	34
1815-19	13	2	-	1	-	-	5	-	-	-	21
1820-21	16	6	12	1	1	4	1	16	1	16	74
1822-24	16	11	9	-	1	2	5	2	-	18	64
合計	50	19	31	14	2	9	20	18	4	34	201

\*地域のうち、リマ市以外はインテンデンシアである。

\*\*地域の認定が困難な者。

出所 Maria Consuelo Sparks, "The Role of the Clergy during the Struggle for Independence in Peru," (Pittsburgh: Ph. D. dissertation, University of Pittsburgh, 1972), p. 236.

## 地域別にみた独立革命へのレグラールの参加状況

年代 \ 地域*	リマ市	リマ	タルマ	クスコ	ワンカベリカ	ワマンガ	アレキバ	トルヒーリョ	プーノ	**	合計
1805-09	5	-	-	3	-	-	-	-	-	-	8
1810-14	7	-	10	6	-	-	4	-	1	-	28
1815-19	40	2	-	1	-	-	4	-	1	-	48
1820-21	36	11	3	3	-	1	1	6	-	9	70
1822-24	11	1	2	-	-	1	1	-	-	7	23
合計	99	14	15	13	-	2	10	6	2	16	177

\*「地域」のうち、リマ市以外はインテンデンシアである。

\*\*地域の認定が困難な者。

出所 *Ibid.*, p. 236.

- (11) *Ibid.*, p. 234, pp. 237-238. 參照。
- (12) 独立後のペルー共和国における「教権」に関して、ゴンサレス・ブラダやマリアテギの捉え方は興味深い。ホセ・カルロス・マリアテギ（原田金一郎訳）『ペルーの現実解釈のたぐひの七試論』（柘植書房、一九八八年）一五三ページ、一五五ページ。
- (13) Magnus Mörrer, *Perfil de la sociedad rural del Cuzco a fines de la colonia* (Lima: Universidad del Pacífico, 1978), p. 90, p. 106.
- (14) 拙稿「一八世紀アルトゥールにおけるトゥバック・カタリ」の反乱の社会経済的背景」『青山史学』第12号、青山学院大学文学部史学科研究室、一九九一年）八八ページ。
- (15) Alberto Flores Galindo, *Aristocracia y plebe Lima, 1760-1830* (Lima: Mosca Azul Editores, 1984), p. 64. Mörrer, *op. cit.*, p. 89. Magnus Mörrer, *The Andean Past, Land, Societies, and Conflicts* (New York: Columbia University Press, 1985), p. 98.
- (16) *Ibid.*, p. 69, pp. 74-76.
- (17) 註二七『*Ibid.*, pp. 209-211. 參照。
- (18) *Ibid.*, pp. 81-82.
- (19) 拙稿（一九八五年）一七六ページ。
- (20) Manuel Ballesteros Gabrois, "Papeles del brigadier Matheo Pumacacahua," en *Quinto Congreso Internacional de Historia de América II*, ed. de Comisión Nacional del Sesquicentenario de la Independencia del Perú (Lima: 1972), p. 212, pp. 221-222. / ブエノスアイレスの生年月日に関して

- は、歴史家により若干の差がある。本稿では注(9)の三つの文献に共通する生年月日を採用した。
- (21) Mörrer, *Perfil...*, p. 65, pp. 136-137.
- (22) Jürgen Golte, *Repartos y rebeliones. Túpac Amaru y las contrarrevoluciones de la economía colonial* (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 1980), pp. 141-147.
- (23) *Ibid.*, p. 71.
- (24) *Ibid.*, p. 55.
- (25) *Ibid.*, pp. 75-76.
- (26) *Ibid.*, p. 55, p. 105. / Alfredo Moreno Cebrián, *El corregidor de indios y la economía peruana del siglo XVIII* (Madrid: Instituto de G. Fernandez de Oviedo, 1977), pp. 324-325.
- (27) 例えはティンタ地方では、ホトシのミタの負担が大きかったうえに買納でレバルティンメントの合計額は三三・九マン（成年男子一人当たり）であった。拙稿（一九八五年）一六六ページ。
- (28) 拙稿（一九八五年）一七三ページ。
- (29) Juan José Vega, *José Gabriel Túpac Amaru* (Lima: Editorial Universo S. A., 1969), p. 148.
- (30) Galbrois, *op. cit.*, p. 212.
- (31) その拙稿は Vega, *José Gabriel...*, pp. 148-154. 參照。
- (32) 拙稿（一九八五年）一七四ページ。
- (33) 同上論文、一七五ページ。
- (34) Galbrois, *op. cit.*, p. 212.
- (35) 例えは *Ibid.*, pp. 214-215, p. 218. 參照。

- (36) Raul Porras Barrenechea et al. „*Hasta 1973, historia general de los peruanos*, 2 (el Perú virreinal) (Lima: Talleres Gráficos de Iberia S. A., 1973), p. 177.
- (37) カルロス三世の改革については、拙稿（一九八六年）一〇三—一〇七ページ参照。
- (38) 詳しくは、Sparks, *op. cit.*, pp. 239-240. 参照。／なち、スペインレガートの就任資格者は白人に限られた。スペインレガートの収入は原則として、徴収した貢納の三％であった。John Fisher, *Government and Society in Colonial Peru, The Intendant System 1784-1814* (New York: The Athlone Press of the University of London, 1970), p. 80, pp. 82-83./Lynch, *op. cit.*, p. 9.
- (39) 拙稿（一九八七年）一三三—一三三ページ。
- (40) David Cahill, “Curas and Social Conflict in the Doctrinas of Cuzco, 1780-1814,” *Journal of Latin American Studies*, Vol. 16, Part 2 (November, 1984), p. 248./拙稿（一九八七年）一三三ページ。
- (41) 同上論文、一三六—一三六ページ。
- (42) Fisher, *Government...*, pp. 174-176.
- (43) Sparks, *op. cit.*, p. 240.
- (44) Fisher, “La rebelión...,” pp. 122-123./拙稿（一九八七年）一三三ページ。
- (45) 「般にトマサマ・ヘンミンノ役人の末裔と云ふは、Lynch, *op. cit.*, pp. 26-27. 参照。
- (46) *Ibid.*, p. 16.
- (47) 拙稿（一九八七年）一三三ページ./Lynch, *op. cit.*, p.

16.

- (38) Miguel Ángel Cárcano, *La política internacional en la historia argentina* (Buenos Aires: Editorial Universitaria de Buenos Aires, 1972), p. 173, p. 183./Vicente D. Sierra, *Historia de la Argentina, fin del régimen de gobernadores y creación del Virreinato del Río de la Plata (1700-1800)* (Buenos Aires: Unión de Editores Latinos, 1955), p. 521, p. 526.
- (39) Adolfo Luis González Rodríguez, *La encrucijada en Tucumán* (Sevilla: Artes Gráficas Padura, S. A., 1984), pp. 62-63, p. 71, pp. 81-82, pp. 86-87.
- (40) Rodolfo Puiggrós, *Historia económica del Río de la Plata* (Buenos Aires: A. Peña Lillo Editor, 1966), p. 52./一七九五年に於けるスペインの没落とフランスの革命（Consulado）を、拙稿和訳、David Rock, *Argentina 1516-1982, From Spanish Colonization to the Falklands War* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1985), p. 64.
- (41) 拙稿、Enrique Tandeter, Wilma Milleitich, Ma. Matilde Ollier, and Beatriz Ruibal, “El mercado de Potosí a fines del siglo XVIII,” *La participación indígena en los mercados suramericanos, estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*, compiladores de Olivia Harris, Brooke Larson, Enrique Tandeter (La Paz: Centro de Estudio de la Realidad Económica y Social, 1987), p. 382, p. 386, p. 391./Brooke Larson, “Economic Decline and Social

Change in an Agrarian Hinterland: Cochabamba (Bolivia) in the Late Colonial Period." (New York: Ph. D. dissertation, Columbia University, 1978), p. 306./Mörner, *Perfil...*, p. 90, p. 94, p. 106./Cahill, *op. cit.*, p. 248./ 拙稿 (一九八六年) 一〇四頁ニ參照。

(53) Alberto Flores Galindo, *Arequipa y el sur andino: ensayo de historia regional (siglo XVIII-XX)* (Lima: Editorial Horizonte, 1977), p. 21./ノゲル Fernando Silva Santisteban, *Los obreros en el virreinato del Perú* (Lima: Museo Nacional de Historia, 1964), p. 150./Tandeter etc., *op. cit.*, p. 417./キブニクは縮絨機 (batán) 二一〇以上の織機を有す。チョリリーヨは小規模な家内工業であり、オブラは製布に比して廉価で低品質の織物を生産。Mörner, *Perfil...*, p. 82.

(54) Flores Galindo, *Aristocracia...*, p. 63, p. 67./Tandeter etc., *op. cit.*, p. 396.

(55) 詳細は Flores Galindo, *Arequipa...*, pp. 27-28./Luis Miguel Glave, "Problemas para el estudio de la historia regional: el caso del Cuzco," *Allpanchis*, Vol. XIV, No. 16 (Cuzco, 1980), p. 154./Wibel, *op. cit.*, p. 73, pp. 79-84. 參照。  
(56) アレキバ地域は良港に恵まれていた。アリカ、イキケ、イロ、キルカ、アラント、モジエン下の諸港が有名。Ibid., pp. 74-76.

(56) 拙稿「一八世紀ペルーにおけるアレキバ蜂起の社会経済的背景」(『COSMICA』第二二号、京都外国語大学、一九九三

年)九ページ、一三—一四ページ。

(57) Tandeter etc., *op. cit.*, p. 396, pp. 400-401, p. 415, p. 419./一七八〇—一八〇二年、アレキバ地域の有力地主の構成は次の如くである。

なお、一七九〇年代のラプラタ副王領からアレキバ地域への輸出品三万九千二百〇五(年間)の内訳については、Ibid., p. 77, p. 80. 參照。

農耕地帯 地主	アレキバ 平野	ビトル 谷	タンボ 谷	マヘス 谷	モケグ ア谷
クリオーリヨ	30	23	8	44	44
(僱人)	(2)	(2)	(1)	-	(1)
スペイン人	6	6	2	3	2
(僱人)	(5)	(5)	(2)	(2)	-
修道院	3	-	-	2	2
不在者	1	1	-	1	2
確認できた人数	40	30	10	50	50
全農地数(概算)	350	100	不明	400	200

出所 Wibel, *op. cit.*, p. 473.

(58) Ibid., p. 58, p. 67.  
(59) Ibid., pp. 59-62, p. 76.  
(60) Ibid., pp. 479-494.  
(61) 拙稿(一九八七年)一三五ページ。  
(62) メルナーは、一七世紀から一七七〇年頃にかけてクスコ地域のオブラへが絶頂にあったと述べている。例えば、アパンカイ地方の織物生産の推移をみると、一七七七年に四三万五七八〇バラだったのが、一七八〇年直前には一〇万四〇〇〇

ハラを下回り、一七九〇年には七万〇〇〇ハラ、そして一八〇三年には二万五〇〇〇ハラに下落してゐる。Mörner, *Perfil...*, p. 83, p. 86/その他。詳しくは Silva Santisteban, *op. cit.*, p. 151./Larson, *op. cit.*, p. 223, p. 248./Lynch, *op. cit.*, p. 18./Glave, "Problemas...", pp. 146-149./Tandeter etc., *op. cit.*, pp. 383-384. 参照。

(82) Wibel, *op. cit.*, p. 60.

(83) 詳しくは Mörner, *The Andean Past...*, p. 97. 参照。アルトゥスナーではラハスのインテンテンシヤにおける貢納徴収額が最大であった。Larson, *op. cit.*, p. 352.

(84) Fisher, *Government...*, p. 80.

(85) 拙稿 (一九八七年) 一三四—一三五ページ。

(86) Donald Lloyd Gibbs, "Cuzco, 1680-1710: An Andean City Seen through its Economic Activities," (Austin: Ph. D. dissertation, University of Texas, 1979), p. 31.

(87) カハロス三世の改革期とつう点から判断して、一七五四年の貢納徴収額が一七六〇年代のそれを上回るとは考えられな

い。  
(88) 一七八六年、カルカ・イ・ラレス地区の全人口トピシエンタ数の内訳は下段の表の如くである。

また当該地区のアシエンタにおける穀物「シヤカイキ」栽培等の品目別生産内訳は Mörner, "Some Characteristics...", pp. 20-21./Mörner, *Andean Past...*, p. 82. 参照。

村 (doctrina)	全人口 (人)	アシエンダ数
ビリャ・デ・カルカ	1, 878	10
ラマイ	2, 028	4
ピサック	3, 386	15
チンチューロ	1, 671	3
ラレス	891	6
合計	9, 854	38

出所 Mörner, *Perfil...*, p. 137.

(70) 詳しくは Cahill, *op. cit.*, p. 250, pp. 252-253. 参照。

(71) 詳しくは *Ibid.*, p. 242, pp. 262-263. 参照。因デナムコのインテンテンシヤにおける司祭の人数は一〇七人(一八〇四—一八〇五年)。ノブマカウアによる一〇分の一税への関与については Gailbrois, *op. cit.*, pp. 215-216. 参照。

(72) Scarlett O'Phelan Godoy, "El sur andino a fines del siglo XVIII: cacique o corregidor," *Allpanchis*, Vol. XI (1978), pp. 18-19.

(73) 拙稿 (一九九三年) 八ページ。

(74) Mörner, *Perfil...*

p.154/チヌコのインテンデンシアー〇地区におけるアシエンダの分布(一七八六年)は下の表の通りである。

地区名	アシエンダ数
アバンカイ	81
アイマラエス	11
カルカ・イ・ラレス	38
ウルバンバ	61
コタバンプス	22
バルロ	43
チュンビビルカス	57
カナス・イ・カンチス (ティンタ)	39
クスビカンチス	116
パウカルタンボ	106
合計	574*

\*「647」とあったのを修正した数字。  
出所 *Ibid.*, p. 32, p. 51, p. 134, pp. 136-138, pp.140-141, pp. 143-144, pp. 146-147.

(75) Cahill, *op. cit.*, p. 249/拙稿(一九八七年)一三七—一三ハページ。

(76) Bethell, "A Note...", p. 230.

(77) 司祭はカシナと同様で原住民大衆のリーマーとなりうる存在であった。Scarlett O'Phelan Godoy, "El mito de la independencia concedida: los programas políticos del siglo XVIII y del temprano XIX en el Perú y Alto Perú (1730-1814)", en *Independencia y revolución 1780-1840*, Tomo 2, Compilación de Alberto Flores Galindo (Lima:

Instituto Nacional de Cultura, 1987), pp. 195-196, p. 198.

(78) リマ商人はスペイン本国に資金援助を行い、「反ナポレオン闘争を支援。加茂雄三『ラテンアメリカの独立』(『世界の歴史』三)」、講談社、一九七八年)六七—六八ページ。Lynch, *op. cit.*, pp. 49-50/Flores Galindo, *Aristocracia...*, p. 210.

(79) 加茂 前掲書 七〇—七二ページ。Mörner, *The Andean Past...*, p. 109.

(80) *Ibid.*, p. 110./Porrás Barrenechea et al., *op. cit.*, pp. 622-623.

(81) *Ibid.*, p. 623/議長フランシスコ・トニョ・イ・サン・クレメンテ (Francisco Muñoz y San Clemente) の死去を契機とする。コイエネチエー族については、拙稿(一九九三年)九ページ、二三ページ及び図1参照。

(82) この反乱では多くのアイマラ族の指導者が出現。反乱は幹線道に沿ってブーノラーヌス・ホトニ間を拡大。Victor Hugo Cárdenas, "La lucha de un pueblo," en *Raíces de América: el mundo Aymara*, Compilación de Xavier Albó (Madrid: Alianza Editorial, S. A., 1988), p. 508.

(83) Wibel, *op. cit.*, p. 235.

(84) *Ibid.*, p. 235./Herbert S. Klein, *Bolivia, The Evolution of Multi-Ethnic Society* (New York: Oxford University Press, 1982), p. 91./Leon G. Campbell, *The Military and Society in Colonial Peru 1750-1810* (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1978), p. 223./Mörner, *The Andean...*, p. 109.

(85) 一方、ピョートルスタンは一八一五年にはアレキバの戦時



- のインテンデントに、また一八一六年にはクスコのインテンデントに就任し、スノー独立までクスコ市に在住する。
- Wibel, *op. cit.*, p. 166. p. 238./CDIP, III, Vol. 7, pp. 604-607.
- (8) O'Phelan Godoy, "El mito..." p. 155, pp. 196-197./Scarlett O'Phelan Godoy, *Rebellions and Revolts in Eighteenth Century Peru and Upper Peru* (Cologne: Böhlau Verlag, 1985), p. 302.
- (28) 詳解は Klein, *op. cit.*, p. 92. 参照。
- (88) Flores Galindo, *Aristocracia...* pp. 210-211.
- (89) 解放軍の指導者カヌチリはクリオリーヨだったが、それによつて「インカ」のイメージによつて原住民大衆の支持を得たといふ。これより以前の二八〇五年にはカブリヘル・マキラルとマヌエル・ウバルデといふ二人のクリオリーヨが同様の方式によつてクスコから反乱を起つて居る。Glave, "Problemas..." p. 152./ロチャハンバ、ホルロ、カンタナスを解放軍は襲撃。Klein, *op. cit.*, p. 93.
- (86) Cárdenas, *op. cit.*, pp. 508-509./O'Phelan Godoy, "El mito..." p. 154, p. 156.
- (15) Fisher, "Royalism..." pp. 250-251./Virgilio Roel, *Los libertadores, proceso social económico, político y militar de la independencia* (Lima: Editorial Gráfica Labor, 1971), pp. 49-51.
- (26) タクナの反乱はフランシスコ・マンタニホ・デ・サラが率ゝスノー南館とアムトスノーの統合を叫び出した。Ibid., pp. 47-49./Fisher, "Royalism..." pp. 247-248. 参照。
- (85) 一八一三年二月のサルタの戦いで王家軍は敗れた。ロドリゴ

- デコイエネチエはスペイン人将官ホアキン・バヌエラと更迭される。コイエネチエは一八一四年でスペインに戻る。
- Wibel, *op. cit.*, pp. 236-237./ヤコビ Emilio A. Bidondo, *La guerra de la independencia en el Alto Perú* (Buenos Aires: Circulo Militar, 1979), pp. 50-72. 参照。
- (5) Carlos D. Malamud, "El fin del comercio colonial: una compañía comercial Gaditana del siglo XIX," en *Independencia y revolución 1780-1840*, Tomo I, Compilación de Alberto Flores Galindo (Lima: Instituto Nacional de Cultura, 1987), p. 40./Klein, *op. cit.*, pp. 93-94./Vega, "Punacahua..." p. 266.
- (85) CDIP, III, p. xlii./Vega, *José Gabriel...* p. 24./Galbrius, *op. cit.*, p. 212.
- (85) Cahill, *op. cit.*, p. 252.
- (85) Ibid., pp. 265-266.
- (88) Ibid., p. 261./真鍮の廃止決議は一八一一年三月、摂政政使ロドリゴ・デ・サカド・デ・サカド・モナー, *The Andean...* p. 110./Fisher, "Royalism..." p. 250.
- (85) Cahill, *op. cit.*, p. 260. 参照。
- (88) ロドリゴ・デ・サカド・デ・サカド・モナー、前掲書、六一八—六九二—の、Virgilio Roel Pineda, *La independencia historia general del Perú* (Lima: Editorial Gráfica Labor, 1988), pp. 127-128. 参照。
- (11) Heraclio Bonilla, "Clases populares y estado en el contexto de la crisis colonial," en *La independencia en el Perú*, ed. José Matos Mar (Lima: Instituto de Estudios

- Pernanos, 1972), p. 39./Roel Pineda, *La independencia...*, pp. 129-131.
- (82) *CDIP*, III, p. 14, p. 23, p. 28./Atilio Sivirichi Tapia, *La revolución social de los Túpac Amaru* (Lima: Editorial Universo S. A., 1979), p. 188./Fisher, *Government...*, p. 227.
- (83) Heraclio Bonilla, Karen Spalding, "La independencia en el Perú: las palabras y los hechos," en *La independencia en el Perú*, ed. José Maros Mar (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 1972), p. 101.
- (84) Bonilla, *op. cit.*, pp. 39-40, p. 42./Fisher, *Government...*, p. 231. ペドロ・アントニオ・セリナスの民族主義的運動は、1809-1814年の独立戦争の主要な部分であった。この運動は、ペドロ・アントニオ・セリナス (Pedro Antonio de Cernadas) によって率いられた (Marín Concha)。
- (85) *CDIP*, III, pp. 46-48./Bonilla, *op. cit.*, p. 42./Fisher, *Government...*, p. 228.
- (86) Gaihbros, *op. cit.*, p. 217, p. 221./Fisher, *CDIP*, III, Vol. 7, pp. 5-6. 参照。
- (87) 加茂 前掲書, 六九頁。Christine Hünefeldt, "Los indios y la Constitución de 1812," *Allpanchis*, Vol. XI (1978), p. 33./Fisher, *Government...*, pp. 231-232./Morner, *The Andean...*, p. 107./Prien, *op. cit.*, p. 370.
- (88) Carlos Daniel Valcárcel, "José Angulo, líder de la rebelión cusqueña de 1814," en *Quinto Congreso Internacional de Historia de América II*, ed. Comisión Nacional del
- Sesquicentenario de la Independencia del Perú (Lima, 1972), p. 169./Sivirichi Tapia, *op. cit.*, p. 189./Leon G. Campbell, "Recent Research on Andean Peasant Revolts, 1750-1820," *Latin American Research Review*, Vol. 14, Num. 1 (1979), p. 12./O'Phelan Godoy, "El mito..." pp. 193-195./Cruz, *op. cit.*, p. 211-215. 参照。 トリファン・バルセロナの著述によれば、ペリウ・インディアン・チコロ・ワグジュ・ヒル・タマンパ (牧畜用期) を調整しようとしたことは、その目的は、原住民を導くことと、反乱軍に参加した人々に対する対抗策であった。
- (89) Valcárcel, *op. cit.*, p. 170./Fisher, "Royalism..." p. 239, pp. 245-255./リビエラ・カサネタの著述によれば、地方叛乱は、この著述によれば、Glave, "Problemas..." p. 150, p. 152. 参照。
- (90) *Ibid.*, p. 152.
- (91) Roel Pineda, *Los libertadores...*, p. 62./Bidondo, *op. cit.*, pp. 101-106.
- (92) *CDIP*, III, p. 276./Fisher, *Government...*, p. 230./Fisher, "Royalism..." p. 256.
- (93) Valcárcel, *op. cit.*, p. 170./Manuel Jesus Aparicio Vega, "José Angulo, según los documentos de la revolución de 1814," en *Quinto Congreso Internacional de Historia de América II*, ed. Comisión Nacional del Sesquicentenario de la Independencia del Perú (Lima, 1972), pp. 172-173./Fisher, "Royalism..." p. 253./Roel Pineda, *Los*

libertadores... p. 63, p. 65.

(111) Roel Pineda, *La independencia...*, pp. 138-139. / Wibel, *op. cit.*, p. 258.

(112) *Ibid.*, pp. 258-259.

(113) *Ibid.*, p. 259.

(114) Sparks, *op. cit.*, pp. 159-160.

(115) Wibel, *op. cit.*, p. 259.

(116) *Ibid.*, p. 259. / Mary A. Y. Gallagher, "Imperial Reform and the Struggle for Regional Self-Determination: Bishops, Intendants and Creole Elites in Arequipa, Peru (1784-1816)," (New York: Ph. D. dissertation, The City University of New York, 1978), pp. 233-234.

(117) *CDIP*, III, pp. 221-255, p. 263. / *CDIP*, III, Vol. 7, pp. 393-394, p. 668. / Wibel, *op. cit.*, pp. 260-261. / Roel Pineda, *La independencia...*, p. 139.

(118) *CDIP*, III, pp. 265-266. / Svirichichi Tapia, *op. cit.*, p. 190. / Valcárcel, *op. cit.*, p. 170.

(119) *CDIP*, III, p. 266. / Jの註の義年記條の「能は」*CDIP*, III, pp. 304-316, pp. 516-518. / Aparicio Vega, *op. cit.*, pp. 172-173. 是長知だすの。トヤナチの諸國を、反逆軍はリテくの難業を計画しつゝなす。トヤナチの推田の狙は、トヤナチの軍への種をばらしたるなり。トヤナチの他、Roel Pineda, *Los libertadores...*, p. 67. / Roel Pineda, *La independencia...*, pp. 140-142. / Svirichichi Tapia, *op. cit.*, p. 190. 餘照。

(120) 註「能は」 Wibel, *op. cit.*, pp. 261-263. / *CDIP*, III, Vol.

7, pp. 682-683. 餘照。

(121) Wibel, *op. cit.*, p. 262.

(122) Svirichichi Tapia, *op. cit.*, p. 189.

(123) Bonilla, Spalding, *op. cit.*, p. 101. / Fisher, *Governments...*, p. 231. / Fisher, "Royalism...", pp. 256-257. / Fisher, "La rebelión...", p. 125. / Pierre Vilar, "La participación de las clases populares en los movimientos de independencia de América Latina," en *La independencia en el Perú*, por Heracleo Bonilla et al. (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 1981), pp. 211-212. / Glave, "Problemas..." p. 152. 餘照。

#### [付記]

本稿は「トヤナチ・ガルシア・フマカウアの軌跡——トウハツク・アマルの反乱からペルーの独立へ——」(『南欧文化』第十五号、文苑、一九九一年)に加筆して、一九九三年五月一六日、愛媛大学でなされて開催された日本西洋史学会第四三回大会で報告した草稿を基礎としたものである。